

平成 25 年度作文コンクール

安全振興会では、生徒の皆さんの安全意識の高揚を図るために、「安全」又は「健康」をテーマに作文コンクールを実施しています。今年度も素晴らしい作品が721編も寄せられました。伊藤伸子選考委員長、岩壁清吉副委員長、吉岡謙二郎、王尾富美子、桐野輝久、萬俣好明委員の6人の元校長先生に審査をお願いしました。最終選考会議では、最優秀2編、優秀5編、佳作39編が決定されました。この中から最優秀に選考された作品を掲載しました。

最優秀賞

今を生きる私にできること

県立川和高等学校二年

山田 真友子

「ゴオー……ゴオー……」
波の音がこれほど物悲しく聞こえるとは。
気仙沼市階上地区。この夏私が初めて訪れた場所であり、東日本大震災の被災地である。
大震災直後、塩釜市での支援活動に参加した祖父と兄の話からも被害の甚大さは伝わってきた。かといって私に協力できることも見つけられず、以前より少しだけ不便になった生活に戸惑いつつ日々を過ごしていた。
そして二年が過ぎた今年の夏の初め、母が「よかったですら参加してみたら」とボランティアパスの情報を教えてくれた。日程は偶然にも部活動の休日期間と同じ。私は迷いなく参加を決めた。同じ志をもった人が集まるのだから不安もあまり感じなかった。
今回の目的は、被災した海岸を本来の姿に戻す活動をしている現地のNPO法人に協力すること被災地見学だ。
私たちを乗せたボランティアバスが夜に横浜を出発してから何時間眠ったのだろうか。ふと目を覚ますと、そこには朝焼けの清々しい空気に包まれた別世界が広がっていた。
まずは、三百年の歴史をもつ地福寺にてNPO法人代表の方に震災当時の話を伺った。
本堂と位牌はかるうじて残ったこと。津波にのまれても木につかまり助かった人がいたこと。火事は保水力のある木々により鎮火したこと。そして、樹木を育て、津波に負けない森をつくることによって自然と調和する防災を目指すこと。
周囲に広がる真っ青な水平線。寺は岩井崎から八百メートルほど内陸にある。浸水線のある梁など全てが津波の脅威を物語っていた。
いよいよ作業へ。育苗施設でのポット苗作りや丸太運びなどを手伝った。暑かったけれど作業そのものは苦ではなかった。少しでも役立ちたいという思いの方が強かったのかもしれない。途中、地福寺で昼食とともに頂いた冷たいお茶がとても美味しかった。
活動後は、震災の爪痕が残る岩井崎周辺などに立ち寄った。たびたび報道されてきた大型漁船第十八共徳丸を目の当たりにした時には、まるでそこだけ時間が止まったかのような異様な光景に言葉を失った。船の下には漬れたままの車があり、更に胸が痛んだ。すぐ傍の線路上には美しい花々が咲いていた。
自然の猛威の前に人間は無力であると、改めて思う。でも、人間には心のつながりがあり、逆境も必ず乗り越えることができる。今回の活動で出逢った現地の方々の笑顔や眼差しがそれを教えてくれた。
「安全」は決して当たり前前のことではない。災害の痛みを忘れずに普段から充分な防災を心掛け、命ある今に感謝しよう。また、それらを伝えていくことなら今の私にもできる。そう思った。
広い海をまるで眺みつけているかのような岩井崎にある復興のシンボル「龍の松」、物悲しい音を立てながら揺れるさざ波は、今を生きる私たちに明るい未来を運んでてくれるようにも見えた。

最優秀賞

カッター実習で学んだこと

県立海洋科学高等学校一年

野口 実沙子

私達海洋科学高校の一年生は、週一回カッター実習がある。カッターとは、艇長と艇指揮の下に十二人の漕ぎ手が左右に並び、四メートル余りあるオールを持ち、全員が一体となって漕ぐ船のことである。
私は、実習が始まるまで、カッターを漕ぐことがどんなに大変なのか知らなかった。まずオールが重いのだ。それまでゴムボートのオールほどの重さしか想像していなかった私は、十一キロのオールの重さに驚いた。
実習の始めと終わりには「かい立て」と呼ばれる、敬礼や万歳の意味を持つ儀式を行う。艇長の「かい立て」の合図とともに、十二人が一斉にそれぞれ持つオールをカッターの上で垂直に立てるのである。長くて重いオールを立てるには相当な力が必要以上に、全員が息を合わせて一斉に行わないと危険なため、皆必死だ。海の上には当然波があり、カッターは揺れる。万が一立てたオールが倒れ、誰かの頭を直撃したら大惨事だ。オールを扱う時は自分ごとだけでなく、周囲にも十分注意を払わなければならない。
「かい立て」の次は、いよいよカッターを漕ぐ。艇長の「いち、に」の掛け声とともに、全員でタイミングを合わせて漕ぐ。「いち」の声で、重いオールに全身の体重をかけ、後ろに倒れるようにしながらオールを胸に引き寄せ、「に」の声で、今度は腹筋を使いながら前のめりの姿勢に戻る。この繰り返し。これも全員で息を合わせなければ、カッターはうまく進まない。気は遣うし、筋力も限界で、実習の翌日は大抵筋肉痛になる。
しかし、実習は大変なことばかりではない。海の上では潮風が気持ちいい。何げなく海面を見ていると魚が飛び跳ねたりもする。オールに引っかかった海藻をつかんで海に投げ込んだり、お互いに海水をかけ合ったりすることもできる。海の自然を感じることもできる貴重な時間でもある。
カッターは決して一人で漕ぐことは出来ない。誰かが楽をすればカッターはうまく進まない。掛け声がなければタイミングを合わせることが出来ない。舵をきる人がいなければ思った方向に船は進まない。一人ひとりが自分の役割を果たし、皆で協力してこそ、カッターは前進するのだ。
人生を海に喩えるならば、私達は小さなカッターだ。時に嵐に遭い、危険な目に遭おうとも、皆で力を合わせ、全力でカッターを漕ぎながら困難に立ち向かっていけば、光り輝く海の上で、皆が笑顔で「かい立て」をする日が必ず来ると信じたい。
もっとも、現実には嵐が来ると分かっている日は最初からカッターを海に出すことはないのだが。人生には冷静な判断も必要である。